
蒼燦花

佐原古一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼燦花

【Nコード】

N2350I

【作者名】

佐原古一

【あらすじ】

着せ替え人形やヒーローマントで最後に遊んだのはいつだろう？
高校生になった僕が、小さい頃よく遊んだ公園で出会ったのは…
高校生の「僕」が夜の公園で出会った、不思議な出来事。
きつと誰もが身に覚えのある話。

あの通りには、小さい頃よく遊びんだ公園がある。ふと、そんなことを思い出して、学生鞆を腕から下げたまま、僕は公園の中に立っていた。そこにある滑り台もジャングルジムも鉄棒も、僕の記憶の中のそれより、ずっと小さい。

どうして僕はここに来たのだろうか？深い理由はない。もし、この瞬間思い出していなかったら、二度と、この場所には来なかったかも知れない。そういうことは別に、珍しくはないだろう。「どうしてあんなことをしてしまったんだろう」とか、逆に「なんであしなかったんだろう」と悩むことは、多分、誰だつてある。そして答えを見つけた時には、もう、それには意味が無かったりするのだ。

僕は、割とまともな生き方をしてきたと思う。ちよつとつまづくくらいのことはあつても、大きく道を外れることは無かった。悩むことはあつても、嘆くことは無かった。「どうして？」と思うのと同じくらい、「やっぱり」と納得しながら生きてきた。

そんな風に、この日の出来事も、後になつてみれば特に意味が無い、すぐに忘れてしまふはずのものだったのだ。

九月が過ぎて十月になった。見上げた秋の空は遠くに感じる。

公園の中には誰もいない。まだ子どもが遊んでいてもおかしくない時間のはずだった。それを確かめる為に、僕はブレザーの袖をまくる。

何も巻かれていない素肌の手首がそこにあつた。時計を忘れてきてしまったらしい。慌てて鞆の中を探し回つたが、携帯電話も見つからない。

そう言えば、昨日の夜に電池が切れたから、充電していたんだつた――。どうやら、そのまま家に置いてきたらしい。公園の隅に、

針金のように細い時計塔が立っていた。ペンキの剥げかかった支柱には「故障中」と書かれた紙が貼られている。

時間を確かめることを諦めて、僕はブランコに近づいた。僕がブランコの上に座ると、錆びた鎖は金きり音をたて、悲痛そうに身をよじる。ブランコは何も変わっていないのに、彼らはどこか、余所余所しい。

いや、むしろ変わっていないからなのだろう。彼らが変わっていないからこそ、変わってしまった自分を実感する。

小さかった頃の僕にとって、ブランコの上が、一番空に近い場所だった。

あの頃特等席だったはずのこの場所が、今は遠い。ブランコに乗る度に何度でも湧き上がってきた、あのウキウキする感覚を、もう一度味わうことはできなかった。

いたたまれない気分にするなる。

ふと、空を見上げる。見上げた空は、遠かった。

正確な時間は分からなかった。公園に入って、十分は経っていたように思う。

「今晩は」

二秒くらい遅れて、それが自分にかけられた声なのだと気付いた。僕が顔を上げる前に、彼が言う。

「お兄さん、この近所の人？」

ようやく僕は振り向いた。そして、まじまじと「彼」を見つめる。僕に言わせれば、彼の方こそ「お兄さん」だった。

彼は白い着流しを一枚着たきりで、閉じた赤い番傘を携えている。何より目を奪われるのは、白い着流しの上に収まった金髪だった。柔らかくそわなくせつ毛が金色に染まっている。僕が鮮やかな金色に目を奪われていると、彼は口の端を上げた。

彼の瞳は、緑色だった。それがまた、僕に瞬きを忘れさせる。

「隣、いい？」

僕が短く頷くと、彼はブランコの板を軋ませながら僕の隣に座っ

た。

「その制服、駅の方こうにある高校のものでしょうか？」

僕はもう一度、黙って頷いた。

「やっぱり。いや、弟がね、君と同じ学校に通ってたんだ」

なる程……。彼は懐かしい制服を見かけて、つい声をかけたくなくなってしまうのかも知れなかった。

「君、こんな所で何してるの？」

お兄さんが神妙そうな顔をする。僕は小さく笑って答えた。

「……昔のことを思い出していただけです。小さい頃は、毎日ブランコを漕いで遊んでたなって」

ブランコを漕いだり、泥団子を作ったり……小さい頃そうして遊んでいたことを、今の今まで、僕はすっかり忘れていた。

あの時、アイツと作った秘密基地は、どうしたっけ？

あの頃、確かにあった空への情熱はどこへ行ったのだろうか？

毎日つけていたヒーローの変身ベルトは、どこに消えたのか。押入れの中に入れておいた筈なのに、いつの間になくなっていた。

一体、どこへ……？

「どうしたの？」

「いえ、あの……なんでも、ないです……」

結局それしか言えなかった僕は、再び俯いた。お兄さんの瞳の色は深く——どこかこちらを探るように鋭い。穏やかで優しいのに——海の底のように、穏やかながら、得体の知れない、深い緑だ。

「ブランコを漕ぐのが好きだったの？」

「小さい頃の君はさ」と言い足して、彼は笑う。つられて僕も笑おうとしたが、慌てたせいか、泣き笑いのような顔になった。

「はい。でも、思い出せないんです。何で、ブランコを漕ぐのが好きだったのか」

僕が体を前のめりにすると、つられてブランコも揺れる。けれど、ブランコと一体になっているという感覚は無かった。小さい頃は、確かにそう思えたのに。

「どうしてでしょうね。」

どうして子どもは、秘密基地を作るのだろう。どうして人形でおままごとをするのだろう。どうしてブランコを漕ぐのだろう。

そんなことをしても、意味は無いのに。

「いいんじゃないの別に。理由なんかなくなつて。打算の無い願いとか希望つて、素晴らしいと思うよ」

そう言つてお兄さんはゆっくりとブランコを漕ぎ始めた。手入れがされていないせいで、ブランコはキィキィと鳴き声を上げる。

「理由や意味が欲しいなんて言うのは、大人だけさ。そんなものは、見返りや保障の言い換えに過ぎない」

「見返りや保障、ですか？」

「そう。こうすればこうなれるとか、こうしておけば安全だからとかね。つまり、打算。」

もちろん子どもだって、みんなの注目を集めたいとか、先生にほめられたいとか思うことがある。けど、秘密基地づくりやヒーローごっこは、どうだろう？ そういった打算とは無縁のはずだ。少なくとも、僕はそうだった。

「まだ、帰らなくていいの？」

不意にお兄さんが口を割った。確かに。すっかり時間が遅くなつてしまった。母さんは僕が運動部に入っていることを知らないから（練習にも参加していないし……）、僕の帰りが遅くなっていることを心配しているだろう。

でも、このまま帰つてしまつていいのだろうか？ 何故かそんな風に気が咎めて、僕は腰を上げられないでいた。

どうして？ 何の為に？

それは、分らない。理由なんか無いかも知れない。ただ、僕は「平気です」

とだけ伝えて、前を向いた。お兄さんも目の前にある砂場を見ているようだ。砂場には、誰かが作つてそのままの砂の城が放置されている。お兄さんは言った。

「打算無く作られたものは、美しいと思うよ。目の前の城なんか、いい例だ。もう明日には無いかも知れない無名の城さ。それでも子どもは城を作る。何度でもね。」

それは「ひたむき」、と言うのかも知れない。

「ただの砂から城を作るなんて、素晴らしいよね。でもね、砂の城じゃ、保障できないんだ。明日もその次も、その先の生活も」

「子どもの内は、保障されてますからね」

「そうさ。多分みんな、子どもの頃が、一番やりたいことをやりたいうようにやってたんじゃないかな。少なくとも、やろうとしていたはずだ。実際にできたかどうかはともかく」

確かに、ダンボールで作った秘密基地は雨漏りがしたり、誰かが踏んづけた跡があったりして、なかなかテレビの中のようにはいかなかった。戦闘機を置く格納庫も無いし、バリアを張ることもできない。本当に、出来合いで作ったオンボロだった。

けれど、僕もアイツも、満足していたように思う。大人になれば、もっと立派な家を買えるだろう。砂の城を作る代わりにできた時間で、稼いだお金で。

でも小さい頃は、とてもそんなことを思えなかった。

働くことが想像できなかったからじゃない。目の前にある秘密基地には、それ以上のものがあると、信じていたからだ。

「別に城じゃなくなたっていいさ。絵でも音楽でもいい。文字だって、並びかえれば、人の目を引く力がある。僕は、そういうものが好きだ。こういうことをするのは、人間だけだからね。人間だけが、武器や牙の代わりに、絵筆を取るという選択ができる」

「人間だけ……」

「そう、動物は本能だけだ。人間には、本能と情熱と……欲望がある。情熱は外に向かって表現する力、欲望は自分の内に何かを取り込んで満たそうとする力。どちらも対象は無形のものが多い。美とか力とか愛とかね」

見えないものを表現しようとして、見えないものを手に入れよう

と必死になる。他に、こんなおかしな生き物がいるだろうか。思わず僕は、笑ってしまった。

「人が物を欲する力っていうのはすさまじいね。その為に命を捨てて大勢を救うこともあれば、逆に命を奪うこともある。まさに両刃の剣だ。けれど僕は、そういうエネルギーが好きだ。何にせよ人を必死にするし、追い詰めたりもする。扱いが難しい分、魅力的だ。きっと、歴史に残る天才や悪人は、この扱いが上手だったんだよ」

僕はお兄さんの方を振り返ってみる。もちろん、そこに彼はいた。彼は、笑っていた。しかし、にこりというよりは、にやりと呼ぶのが相応しい。そんな笑い方だった。

思わず食虫植物を思い浮かべる。華やかな花卉の下に、鋭い牙を隠して、じつと隙をうかがっている。そんな笑みだった。

辺りは静かだ。さつきからずつと、人っ子一人この公園の前を通らない。虫の音も、いつの間にか止んでいた。

「見えない物を手に入れる為に武器を手取る、命を捨てる。他に、こんなことができる生き物はいない」

お兄さん声は、言葉のイメージとは裏腹に、優しく響いた。

「人間だけさ。人間だけが、意味の無いことをする」

彼は立ち上がって前を向いた。つられてブランコが、ギシギシと音を立てて身を揺する。

雲が、月を覆い始める。街灯が一本ぼつんとあるだけの公園の中は、一瞬で暗くなった。

「動物はね、縄張りに入って来る者を徹底的に攻撃するけど、命をとることまではあまりしないんだ。何んでだと思う？」

急に話の内容が変わった。僕は、どう答えるべきか、何故そんな質問をされているのか、どちらも理解できなかったから、黙っているしかなかった。

「縄張りを護れば、それでいいからなんだよ。相手を攻撃することは、ただの手段だ。どうしても相手が縄張りから出て行かなければ殺すこともあるけど、危機が遠のいたと思えば、あっさり見逃

す。本能に忠実な動物でさえ、必要以上に他者を傷つけたり、その命を奪ったりはしないんだ。」

そう言つて彼は振り返る。

「ねえ、人を殺す瞬間を撮つたビデオつて、見たことある？」

思わず僕は目を瞪る。

「もつとも、僕達が目に出来る程度のものなんて、大抵二セモノだけだ」

聞いたことはある。スナッフビデオとかいう奴だ。もちろん、僕が手をつけたことは無い。

「大事なのはね、それを見たがる人がいるつていうことなんだよ」

そう、本当に怖いのはそういうビデオが存在していることじゃなくて……それを欲しがっている人がいるということだ。

どうしてそんなことをするのだろう。何故そんなものを見る必要があるのだろう。

そんなことをしなくたつて、生きていけるじゃないか。そんな物を見ても、意味なんか無いのに。

不意に雲が晴れた。月が再び顔を出す。お兄さんは、ゆっくりと「人間だけだ。人間だけが、生きていくのに必要がなくても、人を殺すことができる」

自分の欲望の為に殺すことができるのだと。

万年青おもじという彼の苗字は、百合の花の一種らしいと、後で知った。昔の人は緑も「あお」と呼んだという。確かに「碧」という字は「あお」とも「みどり」とも読む。

この時の彼はまさに、月を見上げて咲いている百合の花のようだった。

真っ白の着流し。月を照り返す金髪は燦々と。

そして僕は、確かに見たのだ。

彼は、笑っていた。

盛りを謳歌する花のように、華やかな花弁の下に鋭い牙を隠し、甘い蜜で誘い込んだ生き物の命を奪って、一層輝ける姿でさえ、美しい。

そう思わせられるような、笑みだった。

僕は布団の中から、枕元に置いた時計へ腕を伸ばした。ベルの音を止める。今日は祝日だった。

お腹が空いているはずだったが、僕は布団から出る気になれなかった。

あれは何だったのだろう。

昨日出会った彼は。昨日聞いた話は。昨日、月の下で見た笑顔は。どうしてあんな話をしたんだろう。

どうしてあんな人間がいるのだろう。

どうして彼は、あんなことを言ったのか。

この時初めて、僕は何かを痛烈に知りたと思った。

知りたいと思ったことを知れないこと、それが満たされないことの苦しみを、初めて知った。

もっと知りたかった。

あの日に起きた全てのことを、あの時僕が感じたものは、何だったのかを。

そして。

彼がそれを欲望と呼ぶ時に、何故微笑んだのか。

今ならそれだけは、僕にも分かる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2350i/>

蒼燦花

2011年9月9日03時18分発行